

坊守追悼

弔辞 門徒総代 田中 董



美佐子さん、あなただけの
旅立ちに、早いお浄土の
思い起こせば、美佐子
郷土の住職として、故
で通じられ、私たちが共
を喜び、浄土の真宗にも
仏の難さ、身をまもるの
さつおられ、お教えし
のようにならぬ、お聞き
今日まで、法輪寺の坊主
私たちが、梅鶯の壮年会
安らぎの梅鶯の壮年会
たしまの20年、今年で
く、2年前の例が、3年
仏の活動、毎月、綿と
しは、2ヶ月前、佐子と
決して、支え、職のつ
のつ、前にか、出るこ
のつ、前にか、出るこ
のつ、前にか、出るこ

美佐子さんが、ご逝去された
し、つぱい、ご逝去された
い、美佐子さん、ご逝去
好きなお方でした。法
陣には、きれいな掃き
に、下さな、お参りし
て、幸せな、お参りし
が、その、美佐子さん
と、それ、美佐子さん
の、病、強、私、た
佐子さんの、病、強、私
を、祈る、が、だ、は
この、祈る、が、だ、は
で、の、し、た、が、だ、は
住職の、し、た、が、だ、は
ごめ、家、族、の、し、た、が、だ、は
献、身、的、な、様、子、の、し、た、が、だ、は
護、身、的、な、様、子、の、し、た、が、だ、は
密、度、の、よ、う、な、様、子、の、し、た、が、だ、は
を、送、る、の、よ、う、な、様、子、の、し、た、が、だ、は
え、た、も、の、よ、う、な、様、子、の、し、た、が、だ、は



梅鶯仏社「除夜会」(中央が坊守)

も良く、いつも爽やかで、
言葉に出される、陰日向
ま、つ、た、う、な、美、佐、子、さ、ん、が、
ご、自、身、の、終、末、期、を、悟、ら、れ、た、と
き、お、断、り、さ、れ、た、と、お、聞、き、い、た
を、お、断、り、さ、れ、た、と、お、聞、き、い、た
し、て、お、断、り、さ、れ、た、と、お、聞、き、い、た
ニ、コ、ニ、コ、と、さ、ん、な、に、優、し、く、
が、ど、こ、に、あ、つ、た、の、か、と、驚、く、
か、り、で、し、た、が、美、佐、子、さ、ん、の
中、に、は、法、輪、寺、の、坊、主、と、し、て、
が、見、え、て、い、た、の、で、し、よ、う、
す、で、は、安、ら、か、な、お、浄、土、の、世、
が、見、え、て、い、た、の、で、し、よ、う、
私、の、方、が、先、だ、と、思、つ、て、
ま、の、し、た、の、で、先、だ、と、思、つ、て、
言、い、辛、く、述、べ、る、こ、と、は、本、当、
家、族、の、表、せ、ま、に、接、し、て、公、に、
き、本、当、に、有、難、う、ご、い、た、ま、し
た、本、当、に、有、難、う、ご、い、た、ま、し
お、参、り、し、て、は、もう、法、輪、寺、に
お、出、が、こ、も、は、あ、う、な、笑、顔、に
ま、に、お、出、が、こ、も、は、あ、う、な、笑、顔、に
土、の、し、た、が、こ、も、は、あ、う、な、笑、顔、に
土、の、し、た、が、こ、も、は、あ、う、な、笑、顔、に

でした。本当
お疲れ様でし
そして有難う
ございました。
どうぞお安
かに。

長）
（梅鶯仏壮第二代会



題材法話

前号よりつづき

人との別れ、死別に
ついて、ある思想家が
相手ごとにつきのよう
に表現しています。

□友人を失う事は、
自分の

うこの
の人生の一部を失
うこと。

□親を失う事は、自
分の

□過去を失うこと。
分の

□子供を失う事は自
分の

□未来を失うこと。
□配偶者（夫や妻）

を失
る事よりつづき

であり、自分の人生に
おいては、一部分を失う
こと。でしかないとい
います。

「つぎに、親を失う
事」、自分の人生の過
去、特に物心がつくま
でのことは、自分自身

より、親の方がよく自
分の過去を失うこと。

「なる」というのです。
「事」将来を託している

子供に先立たれること
ほど、先立たれること

で、将来を失う。悲し
分の未来を失う。

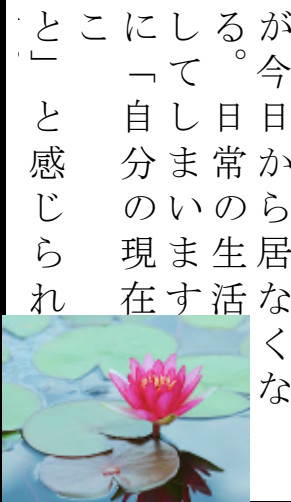
「最後、妻や夫を失
うこと」、昨日まで自

分の人生の中で、自分
然に側に居てくれた人

が、今日から居なくな
る。日常生活

「して、自分の現在
に」と感じられ

と「と」と感じられ



は、確かにこの思想家
に表現しているとは思
えませんが、この自分

が亡くなったらどうな
るの？という疑問

の表現の延長線上でい
えば、自分のすべてを失

は、自分のすべてを失
うこと。ではないです。

うか。もしもそうであ
らば、これはありませ

ん。けれども、「そう
じゃありません」と仰

さる。お方がおられる
です。今私達が育てら

いる。今私達が育てら
は、人間としての世界

を終え、人間としての
とて下さるの

とて下さるの

とて下さるの

とて下さるの

とて下さるの

とて下さるの



す。娑婆の縁尽きて一期
を終えることは、死に

行くのでも、別れ失う
のでもない、南無阿弥

陀仏と「行き来」が
く俱会一処の世界」

待っているのだと約束
して下さっているの

す。人間としての命に
限りがあり、やがて娑

婆では別れていかな
ればならなりません。

これは寂しいことで
す。「恩愛はなはだ断

ちがたく」です。
けれども、その寂しさ

の中に、すべてを包
み込む大きな願いの中

に生かされて生きてい
る私の命であること

を、改めて悦ばさる
頂きたいと思う

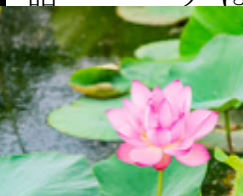
です。完

です。完

です。完

です。完

です。完



仏壮総会
住職法話